

イエスさまは2章で訪ねたことのあるガリラヤ地方の「カナ」へ再び行かれ、そこでカファルナウムからやって来た「役人」と持たれたやりとりが、ここに記されています。彼の「息子が病気なので、是非直ちにカファルナウムまで御同行願いたい」と役人はイエスを訪ねにはるばるやって来たのです。それに対し、イエスさまはこの父親に「**あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない**」と素っ気ない返事をされました。それでもこの役人は、そのような否定的に響く言葉を聞きながらも、お構いなしに主イエスに嘆願します(49 節)。するとイエスさまが答えて下さいました。「**帰りなさい。あなたの息子は生きています**」と(50 節)。すると役人は「**イエスの言われた言葉を信じて帰って行**」きました(50 節)。実際には、まだ彼の息子には何の変化も見えていないにも関わらずに。この役人は、その段階でもう既に信じて、一人家路についたのです。こうして、彼は「**しるしや不思議な業**」を見ないで、ただ主イエスの言葉を信じる信仰へと、主ご自身によって追い込まれるようにして導かれていったのでした。

その帰り道、役人の僕たちが彼を迎えに来て、「**その子が生きています**」ことと告げられ(51 節)、正に主イエスが言われた同じ時刻に息子が直されたことを知ったのでした(52 節)。これは、明確な「しるし」が与えられたということなのでしょう。もう見間違えることのないようなはっきりとした「しるし」です。この「しるし」を見た時に、この役人は本当の意味で“信じる”こと、「**イエスの言葉を聞いて信じる**」(4:41)に至れたのだと思います。ですから、ある意味、癒やされたのは息子というよりもこの父親の方だったのかもしれませんが。そのようにして、主の言葉は、信仰にある親子・真の家族(53 節)を新たに作り出していってくれるのです。